

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red  
Cross Kyushu International College of  
Nursing

三浦綾子「夢幾夜」における「合唱の夢」の夢解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): 三浦綾子, 夢解釈, 音楽, イエス・キリスト, アニムス キーワード (En): MIURA Ayako, Interpretation of Dream, Music, Jesus Christ, Animus 作成者: 荒木, 正見 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000118">https://doi.org/10.15019/00000118</a>

著作権は本学に帰属する。

# 三浦綾子「夢幾夜」における「合唱の夢」の夢解釈

Interpretation of 'Dream of Chorus' in MIURA Ayako's "Yume- Ikuya(many dreams)"

荒木 正見  
Masami Araki

日本赤十字九州国際看護大学  
The Japanese Red Cross Kyushu International college of Nursing

## 要約

この論文は、三浦綾子「夢幾夜」における「合唱の夢」(筆者による仮称)について、夢解釈の手法で解釈する試みである。この「合唱の夢」の構造を確認すると場面は二段階に進行する。一段階目は見知らぬ男から丁寧かつあつかましい手紙が来てやがて彼が登場するところまでである。第二段階目になると花火が上がって教会堂は万国旗で飾られている。すると合唱が天の一角から響く。はじめ「天に栄光、地に平和」とっていたのが、やがて「天に平和、地に平和」と変わり人々は和する。自分は「天国に行っても、平和を叫ばなければならないのか。」と落胆する。二つの段落は共時的に結びついている。特に音楽という、意識無意識の全体を象徴する場面では真の気持ちが語られる。そのように考えれば、見知らぬ男はイエス・キリストであり、さらに作者の他の作品などを参考にすれば、この夢はいつまでも平和が来ないと神に救いを求めるといふ潜在意識を意味しているといえる。

## Key Words

三浦綾子	夢解釈	音楽	イエス・キリスト	アニムス
MIURA Ayako	Interpretation of Dream	Music	Jesus Christ	Animus

## 本旨

三浦綾子「夢幾夜」における「合唱の夢」の夢解釈

荒木正見

この論文は、三浦綾子「夢幾夜」における「合唱の夢」(筆者による仮称)について、夢解釈の手法をもってする解釈する試みである。テキストは、一般に広く流布している角川文庫版『夢幾夜』<sup>1</sup>を用い、夢の検索はその頁に従うものとする。

ところで一般的に、文学作品を、夢解釈という心理的な方法で解釈することには、異論も考えられる。すなわち、文学者が文章化するのであるから、文学的な粉飾や改変を行っているので夢解釈の手法を用いるのは無意味ではないか、また、文学と心理学とは、本来別物ではないかという異論である。

たしかに夢を記したとされる作品にも、例えば夏目漱石の「夢十夜」のように、他人の夢などを挿入して全体を文学的に構成し直したものも少なくはない。しかし、この「夢幾夜」に関していえばそれは比較的少ないと判断してよいのではないかと思われる。

作者はテキスト『夢幾夜』の「あとがき」で、「そこには、全く自分の無意識の世界が、素(す)のまま現れるかも知れない。その素のままの、無意識の自分の姿こそ、わたしの知りたい自分の姿なのである。」<sup>2</sup>、「粉飾もなにもない、つとめて素朴な文章で、見た夢をそのまま書いてきた。そのまま書くことが、わたしにとっては意義があるからだ。わたしとしては、夢を研究する学者が、そのまま研究材料に使ってくれてもいいほどに、粉飾せずに、「夢幾夜」を書いてきたつもりである。」<sup>3</sup>などと記すように、むしろ自己発見の手段としてできるだけ素直に記したいという意志が感じられるからである。従って、作者の意向に沿って三浦綾子の深層を探るという目的で「夢幾夜」を夢として解釈することも意味あることと考えられる。

また、文学と心理学とは異なるという意見は、全くその通りであると合意する。この論文は、文学作品を取り扱ってはいるが、純粹の文学研究からは遠いものである。三浦綾子に関する文学的研究との位置関係から言えば、これは、比較論的研究に相当する。その意味で、王道的な文学研究を傍らから支える機能を有する。

なお、小論において外国語文献は、拙訳を掲載する。

### 1. 「合唱の夢」の構造

テキスト[56～58頁]の夢に「合唱の夢」と仮に名づけたのは筆者であって、三浦綾子はどの夢にも表題をつけていない。この夢には合唱が登場し、重要な働きをするのでそのように名づけた。

まず、ストーリーを構造的に確認する。

場面は二段階に進行する。はじめは、見知らぬ男から丁寧かつあつかましい手紙が来たことに始まる。自分をよく知っていて自分に好意を持っているようだが、自分は全く知らない男である。<sup>4</sup>

このように彼が登場したところで場面は移り次の段階に変わる。

そこでは、花火が上がって教会堂は万国旗で飾られている。すると合唱が天の一角から響く。はじめ「天に栄光、地に平和」といって人々も和していたのが、やがて「天に平和、地に平和」と変わり人々は和する。自分は「天国に行っても、平和を叫ばなければならないのか。」と落胆する。<sup>5</sup>

このように二段階の構造が現れる場合、夢解釈では、眠りの層が変化したと考える。

眠りの層の変化については、まず、生理学的に述べることができる。

妙木浩之編集『[現代のエスプリ]別冊 夢の分析』における編者担当章『『夢分析』の現在』では、夢分析の歴史が手際よく纏められているが、中でも画期的だったのはREM睡眠の発見だとされている<sup>6</sup>。夢を見ているのはこの、まだ多少の意識があり筋肉・神経系も働くREM睡眠期だとされるが、それより深い、それらすべてが眠り込んでしまうN-REM (Non-REM) 睡眠期へと入ろうとする時などのように、眠りが深まる時や、逆に眠りからの覚醒の際には、特有の夢を見るようである。先に筆者は、前者は「穴に落ちたり、階段を落ちたり、絶壁で足を踏みはずしたりする。」後者は「何か明るい所に出ようとしたり、階段を上がったたりする。」と例示した(拙著『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』)<sup>7</sup>。

このように、生理的に全く次元の違う段階への移行は、その次の夢が途絶えることになるが、「合唱の夢」のように、恐らくはREM期の中において進行する中でも、徐々に夢の次元が変化すると考えられる。その場合も、変化の方向性は、眠りが深まる方か、眠りが浅くなる方かという双方向が考えられるし、状況によっては、その双方を行き来することも考えられる。

しかし重要なことは、夢を見ている夢主にとっては、夢は一貫しているということである。すなわち、テーマは連続しているはずである。このような視点から、異なる段階の夢を解釈しようとする場合、夢の深まりによって徐々にテーマが露わになってくると考えられる。一般的な物語解釈において、テーマを潜在させるモチーフが徐々にテーマへと進展していく流れを重視するように、夢の解釈においても、夢の段階的变化に応じてモチーフからテーマへと、構造的に展開していくと考えられる。

以下、その流れを自覚しつつ、この夢のテーマを確認していく。

## 2. 「合唱の夢」の第一段階

先にも述べたように、第一段階の主人公は「見知らぬ男」である。

この男は誰なのか。それは、夢全体から導かれるであろうが、当面この段階で、この男を規定しておかなければならない。そして、その規定のためには、男の行為に着目しなければならない。

筆者は『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』において、夢解釈では「述語による理解」が重要だと述べた<sup>8</sup>。それは以下の理由による。

物語にせよ夢にせよ、表現においては主語にまつわる解釈者の持つ概念をそのまま適用させることは控えなければならない。なぜなら、解釈者の持つ概念は所詮、解釈者の個人的意味づけでしかないからである。ひとつの表現において、主語の意味はその主語がどのように行為し、他者や世界とどのような関係を結ぶかによって規定されるのである。

もちろん現実的な解釈においては、辞書やシンボル事典などで、一般的な意味を確認する。しかし、それをそのまま、赤信号=止まれ、のように当てはめてはならない。多くの意味のうちでふさわしい意味を確定するために、全体の論理や、作者や夢主の状況などを確認しつつ慎重に考察しなければならないのである。

さて、「見知らぬ男」は、以下のように表現されている<sup>9</sup>。「男」という主語はさまざまな意味を想像させるが、とりあえず判断しないで、述語や形容的属性を確認する。

まずは「見知らぬ」である。そしてその男から「手紙が来た」が、その手紙は「一字一字が木彫りのように浮いて」、これに対して夢主は「まあ！ 何日もかかって書いた手紙にちがいないわ」と、情を感じている。手紙には「まだこのわたしが忘れられずに、一人であるのだろう」だとか「どこかの温泉に宿でも取ってくれれば」などと書いてあり、「わたしは結婚しているので」「何を馬鹿な」と思う。いつの間にか、男は「わたしの傍らに」立っていて、「病身らしいひょろりとした背の高い」男である。わたしは「何の見おぼえもない」が「向こうはよく知っているらしい」とも思う。「知らないというのも気の毒」と少しの同情を見せ、「黙っていると、妙になれなれしいので閉口する」とも感じる。

この「見知らぬ男」は、やはりひとつのアニムスであると考えられる。アニムスとは、ユング心理学において、女性の内面における男性的要因を指し、その女性の人格発達にとって統合すべき姿として示されるものである。これに対して、男性の内面における女性的要因をアニマと呼ぶ。

Edited by Alan Bullock and Oliver Stallybrass, *The Fontana Dictionary of Modern Thought*によると、アニマ (anima) は、「生命力や魂という根源的意味から導かれた言葉」「男性の本性の女性的側面を象徴する」「すべての元型 (archetypes) と同様、経験世界へと投影され、彼の母親の最初の表れを見出し、また、同様な投影は妻の選択を支配する」と述べられ、また、アニムス (animus) は、その類比概念だとされている<sup>10</sup>。

ユング心理学の入門書、Edited by Joseph Campbell, *The Portable JUNG*では、アニムスは「型どおりの意見を述べるばかりではなく、同等に、我々が『魂』と呼ぶもの、特

に、哲学的もしくは宗教的な考えや、それに基づく態度を述べる」と述べられているが<sup>11</sup>、アニムスはそれを内包する女性の人格的発達段階に応じて、このような高度な現われ方をする場合もある。

この夢の場合、まず「何日もかかって書いた手紙にちがいない」だとか、「気の毒」という同情はもちろん好意として、統合するために必要だという実感の表現であることはいまでもない。が、さらに、その男が手紙を出したり、それは自分に好意的な内容の、それもきわめて直裁的な好意を示す内容の手紙であったり、さらには、自分の傍らに立ち自分をよく知っていて、なれなれしい素振りをするなどの、わたしに対する一方的な関わりを、わたしは夢の中で迷惑がったりもしているが、この夢を見させているのは夢主その人であるから、夢主にとってこの男は統合するために必要な存在であることになる。すなわちこの「見知らぬ男」は、自分と統合しなければならないはずの一男性的要因である。

他方、その属性は、「見知らぬ」以外に「病身らしい」「背の高い」などと示される。

「見知らぬ」については、一方では夢主は、わたしを知っているべく夢見ているのだから、潜在的には親しい存在だといえる。「病身らしい」と「背の高い」については、その後の夢の展開を参照しなければならない。

夢のメカニズムについて、河合隼雄『無意識の構造』には「夢は意識と無意識の相互作用のうちに生じてきたものを、自我がイメージとして把握したもの」<sup>12</sup>と述べられているが、それに、エネルギーのダイナミズムを加味して「夢とは意識無意識の非恒常的な内容がテーマとなって現われ、その結果、エネルギーの状態にふさわしい恒常性（ホメオスタシス）に到達するもの」と定義することができる。

夢主は女性であるから、この「見知らぬ男」は、この夢主が恒常性に到達するために必要な男性的要因だと言える。

アニムスは、夢の中で過去に知り合った誰かに投影される事もあるが、たとえ具体的なだれかが現われたとしてもあくまでその属性＝述語で解釈する。ここでは病身らしいというのだから、弱いアニムス、助けたくなるような男性像である。しかし夢主は積極的に行動せず、場面を代えてしまう。そのような統合がまだ遠いことからくる防衛であると考えられる。

### 3. 「合唱の夢」の第二段階

この夢は、突然、場面が変わり第二段階<sup>13</sup>へと移る。「見知らぬ男」も姿を消してしまう。場所も自分の部屋から教会に移っている。しかし、先に述べたように、第一段階とはどこか繋がっているはずである。

夢はその全体をもってひとつの夢である。そこで起こったことは、意識的ではないだけ

に、無意識的な必然性によって隙間なく構成されているはずである。

H.Rombach, *Strukturontologie –eine Phänomenologie der Freiheit* で、「全体の一契機と全体そのものとの間には、隙間の無い密着した同一性がある。」<sup>14</sup>と述べられるように、世界存在そのものをすべてこのような、全体と部分との隙間無い連関として捉えられる。そして、そこから導かれる物事の精確な理解においては、「ひとつの契機と隣接諸契機との同一性、ひとつの契機とすべての諸契機からなる全体との同一性、諸契機間の差異とすべての契機の同一性との同一性」<sup>15</sup>の三種の同一性によって構成されていることを重視すべきだと述べられる。

上に述べてきたことから、とりわけ夢の解釈においてはその必然的構成ゆえに、諸契機と全体とに関係する上記の同一性に着目しながら解釈を進めなければならない。

さてまず想定してかからなければならないのは、この第二の段階が、本来のテーマに向かってより深まったものか、それとも覚醒に向かってテーマから遠ざかったものかの双方の可能性が考えられるが、この場合、以下の点で深まったものだと考えられる。

第一には、より非現実だということである。第一段階が現実には寝ている自室であったものが、第二段階では現実から離れた教会へと移動している。それゆえに、本来はこの教会の夢こそがテーマであったと考えられる。

第二には、音楽の夢だからである。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* では、音楽 (Music) は「病気を癒す」「死者を蘇生させる」「豊饒」また反対に「死」、さらに「意志」などの意味と並んで「創造」という意味が示されている<sup>16</sup>。特に「創造」のメカニズムに着目しつつ、これらを一言で、音や音楽は意識無意識の交流における原初的かつ本質的な性格を持つ、と言えよう。映像的な芸術療法で、楽器のような音や音楽に関するものが示されると、無意識的なエネルギーを得て無意識の内容を発展的に形にしていって兆しと解する。

三浦綾子は讚美歌にさまざまな箇所と言及するほか、夫のカラオケや、知人の歌など音楽に意識を向けることの多い作家である。テキスト [21~22頁] の夢には、音楽に対する作者のこのような傾向性がよく現われている。

田舎の学校のようなところで自分は大人ながら一年生ぐらいの子どもたちと一緒に机に向かっている。しんとした教室で、不意にすぐ傍で青い火がゆらゆらとゆらめき、ぱっと消える。先生は昔の同僚だった人で「今夜は旭川の通夜だった」という。自分の机の上には「悪霊が天井にも満ちている」と大きく書かれた古新聞の切抜きが載っている。蜘蛛の巣だらけの天井に無数の火の玉がちろちろと青く燃えている。そこで私は「歌で悪霊を退散させようと思った」ので、「サクラ、サクラ」の歌を、大声を張り上げて「サー」と歌った瞬間、夫君に揺り起こされた、という夢である。

ここで重要なのは、歌で悪霊を退散させるという点である。このような発想はしばしば

耳にするし、讚美歌、念仏、題目、声明など宗教にも発声がつきものなのは、基本的にはこのような悪霊、すなわち心の迷いを去る働きがあるからだといえる。

この夢の場合、旭川の通夜という抽象的な不安が語られる。死んだのは夢主にとっての旭川の意味である。また火が燃えていることから、これは「死と再生」という発達の契機であり、新たな意味が生じる契機である。可能的な一例を挙げれば、夢主にとってそれまでは旭川という範囲で物事を考えていたのが、その範囲が広がるということも考えられる。と、それだけならよいことだが、この夢の印象は不気味である。それは、それまでの意味が変容しかかっていることをまだ受け入れられない状態だからである。共時的にみれば自分はまだ小学一年生の教室にいるのである。その未熟さを脱却すべき準備が出来ているのに、まだその境遇に留まっていたいのである。

このような無意識の状態を形にして意識に伝えるのが音楽である。ここでは、「サクラ、サクラ」の歌である。未だ整わない無意識を精一杯整えて表現するのがこの歌である。日本的な歌の典型であるこの歌を選び取ったのは、夢主の個人的傾向性である。

このように歌おうとするとき、REM期特有の現実との融合が起こり、揺り起こされてしまう。この、どこかユーモラスな結末ははからずも、これまでの内容へのゆとりを感じさせる。まさに、人格発達の夢でもあるからであろう。

さて、「合唱の夢」に戻るが、先にも述べたように、「場所がいつしか教会に」<sup>17</sup> になっているのは重要である。自分の部屋と教会の違いが宗教的雰囲気にあることはいうまでもない。従って、この夢は宗教、すなわちキリスト教に関する夢だと解することが出来る。

関茂「三浦綾子とキリスト教」(『国文学 解釈と鑑賞 810 第63巻11号』)では、三浦綾子「と」キリスト教として、彼女のキリスト教との出会いが、二重婚約などに対する罪の意識に由来するとし<sup>18</sup>、また、「信仰は決断である」という三浦綾子「の」信仰の「この一点において三浦綾子は三浦綾子であり、その作品はその作品である」と述べられ<sup>19</sup>、この「と」と「の」との循環が三浦綾子の人と文学をつらぬく生命的なものの秘密であると述べられている<sup>20</sup>。このことは、現実的には三浦綾子の人生と作品そのものが信仰告白であることを意味することは言うまでもない。その三浦綾子にとって、夢という、意識的な防衛が取れた場面での教会は、キリスト教の福音が為されるはずの心理状態を意味する。

そこではぼんぼんと花火が上がり、何かのお祭りか記念日のようなのである。しかし夢主には心当たりが無い<sup>21</sup>。これは内面的な高揚なのだから、特に具体的な何かである必要はない。少なくとも今までの夢の経緯の中で、画期的な喜びが得られたことを意味する。となれば、夢主は高揚しているのであるから、天の一角から合唱が響くのも当然だといえる。

さて、夢の中で起こった問題はその合唱の内容である。天と和す合唱だからその意味は真実である。そして無意識の曖昧さを形にしたものである。

その歌詞は一般的な「天に栄光、地に平和」から、「天に平和、地に平和」へと変わる。夢主の分身である私は不審に思う。このような不審や違和感（異和感）は、一般的な解釈でも重要な手がかりである。筆者は『人格発達と癒し 一昔話解釈・夢解釈』で、「違和感とは、対象の全体と、自己の認識の全体との不一致」だと述べ<sup>22</sup>、それこそがテーマであるとした。従って、天国に栄光があるのではなく、平和を唱えなければならない事態というのは、夢主の深層がそのような状況だということである。

私は夢の中で「天にも「平和」を必要とするのだろうか。天には「栄光」だけあればいいのではないだろうか。天国に行っても、平和を叫ばなければならないのか。つまらぬ天国になったものだ。」<sup>23</sup>と、考えている。

構造的にも、この感想こそがこの夢の行き着く先、すなわち、夢主の内面において合唱で歌われるまでにかくも絶対的に天国の栄光が薄れた、というテーマである。夢主の心の中で、おそらくはこの世はいつまでも平和にならないという現実的な絶望の中で、神の栄光が翳りを持ったときの夢であろう。もちろん、これはあくまで夢主において一過性の心理状態であって、三浦綾子自身が基督教に疑いを抱いているというわけではない。むしろ、救いを求めていると解すべきであろう。そのことは次節に述べる。

#### 4. 結び

さて、この段階に至って、第一段階の見知らぬ男の意味が改めて確認できる。物語解釈においては、共時的解釈の態度を意識することも有効である。共時的解釈とは「時間や空間の変化には無関係であり、論理的もしくは共同主観的に普遍的な意味を求めること」（拙著『共時的解釈の方法』<sup>24</sup>）と述べる事が出来る。さらに、科学的因果性を超えて、何か、因果的関係があると思われること、とも言える。

第一段階の夢と、第二段階の夢とは、同じひとつの夢であり、共時的には関連しているはずである。従って、両段階の夢に繋がる要因を、とりわけ述語的に考えてみると、両方ともどこか病んでいることが浮かび上がってくる。テーマはまさにそのことであった。

となれば、「見知らぬ男」の正体が明らかになる。彼はイエス・キリストである。

先に述べたように、夢主三浦綾子にとって、イエス・キリストは、慣れ親しんでいる存在である。先に述べたように、「何日もかかって書いた手紙にちがいない」「気の毒」という同情が、統合するために必要なのは当然である。また、その男が手紙を出したり、自分の傍らに立ち自分をよく知っていたりなど、なれなれしい素振りをするなどの、わたしに対する一方的な関わりは、この夢を見させている夢主その人の気持ちの投影であるから、夢主にとってこの男は統合するために必要な存在であり、自分と統合しなければならないはずの一男性的要因であると述べたが、イエス・キリストだとすれば納得がいく。

その属性は、「見知らぬ」以外に「病身らしい」「背の高い」などと示されたが、この、「見知らぬ」については、夢主はわたしを知っているべく夢見ているのだから、潜在的には親しい存在だと述べた。「病身らしい」は、まさにこの夢のテーマと共時的に結びつくことが、今となって明らかになる。さらに、「背の高い」は、救い主イエスだと考えればふさわしい属性だと言える。

かくしてこの夢は、第一段階、第二段階を通して、神の栄光が薄れたのではないかと、ひとつのテーマへと導かれたことが明らかになった。

しかしそれは、夢というものの性質を考えれば、夢主三浦綾子が神を疑っているということではない。実際に、テキストにもイエスに全面的に救われる夢〔四九頁〕も存在するのである。

その夢を瞥見し、簡単な解釈を加えておく。

三浦綾子は「見たいと思いながら、極めて少ないのがキリストの夢」<sup>25</sup>と述懐しているが、敬虔な信仰者にとってそれはむしろ当然である。

先にも述べたように夢とは意識無意識全体の非恒常的な側面がテーマになるのだから、信仰という統合的な生き方をしている場合には、常によりよく生きるべく努力するその生き方自身が恒常的な生き方となり、改めて夢に見る必要がないといえよう。しかしそれでもなお人は、自覚するしないにかかわらず、強い非恒常性に陥ることがある。その際、信仰者は救われる夢を見る。〔四九頁〕の夢はその典型である。

この夢はまず、真っ暗な夜、坂道を落ちていく。崖下の濁流を豚や牛の首が流れ、そこが地獄だと直感する。もうだめだと思ったその時、崖の途中に大きく手を開いて待っているイエスにしっかりと抱きとめられて、厳粛な思いで、ああ助かった、と思ったという夢である。

真っ暗な夜、坂道を落ちていくという夢は、生理的に単純に解釈することもできる。夢はREM睡眠期に見るものとされるが、意識が半分覚醒しているREM期から、眠りが深くなって全く意識が無くなるとされるN-REM睡眠期に入ろうとする時には、暗く深い場所へと落ちていく夢をみるものとされるからである。

しかしその際、健康な場合には不安を感じることも無く自然に眠りが深まっていくのだから、この夢には何らかのわだかまりがあることになる。それが身体の不調によるものなのか精神的なものによるのかはわからないが、エネルギーが消耗して、まっすぐ熟睡に退行していくことに不安があったことが示される。

そのような場合、多くは悪夢にうなされるであろうが、この場合には日ごろの信仰が助けになる。イメージにしっかり焼きついたイエス・キリストが抱きとめてくれるのだから、明晰である。まさに危機的な心身の状況を信仰の強さが食い止めた夢だといえる。

このような夢を見ることもある以上、「合唱の夢」ひとつを取り上げて、三浦綾子の信仰

の強弱を議論することは無意味である。

また、夢とは意識無意識の全体のコンディションに強く作用される。一方では、社会的問題に強い関心を持っていた彼女が、世界平和が訪れないことを悲しく思っていたことは当然であろう。その時、無意識的に救いを求めたのが神である。意識無意識の全体の象徴である夢において何か弱まっているという場合、弱まっているのは自分の全体である。この夢は、むしろ、平和に対する疑いという自分の弱まりが神への救いを求めたと解することが出来るのである。

かくして、三浦綾子の夢の一端と彼女の人生の一側面を垣間見たが、針の穴ほども見えていないことは明らかである。多才な作品と人生を送った彼女が残した多くの業績を今後いつそう深く追求していかねばならない。

#### 参考文献：

1. 三浦綾子『夢幾夜』角川書店、角川文庫、平成5年／平成12年
2. 『夢幾夜』151～152頁
3. 『夢幾夜』152頁
4. 『夢幾夜』以上56頁
5. 『夢幾夜』以上57～58頁
6. 妙木浩之編集『[現代のエスプリ] 別冊 夢の分析』至文堂、1997年、14～15頁
7. 拙著『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』ナカニシヤ出版、2002年、105頁
8. 『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』111頁
9. 『夢幾夜』56頁
10. Edited by Alan Bullock and Oliver Stallybrass, *The Fontana Dictionary of Modern Thought*, Fontana/Collins, 1977, p.24
11. Edited by Joseph Campbell, *The Portable JUNG*, Penguin Books, 1971/1976, p.154
12. 河合隼雄『無意識の構造』中央公論社、中公新書、昭和52年、57頁
13. 『夢幾夜』57～58頁
14. H.Rombach, *Strukturontologie -eine Phänomenologie der Freiheit*, Karl Alber, 1971, S.34
15. *Strukturontologie -eine Phänomenologie der Freiheit*, S.39～40
16. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Pb. Co., 1974/1976, p.446

17. 『夢幾夜』 57頁
18. 関茂「三浦綾子とキリスト教」、『国文学 解釈と鑑賞 810 第63巻11号』至文堂、1998年11月、26頁
19. 『国文学 解釈と鑑賞 810 第63巻11号』 28頁
20. 『国文学 解釈と鑑賞 810 第63巻11号』 28頁
21. 『夢幾夜』 57頁
22. 『人格発達と癒し 一昔話解釈・夢解釈一』 112頁
23. 『夢幾夜』 57～58頁
24. 拙著『共時的解釈の方法』中川書店、1994年、4～5頁
25. 『夢幾夜』 153頁

付記：

1. この論文は、平成15年度本学奨励研究の一環として出版された荒木正見編著『三浦綾子の癒し 一人間学的比較研究一』（中川書店、2004.3）における筆者分担分の章を執筆するための基礎研究である。本来、奨励研究の成果公表のひとつとして本誌第2号に掲載されるべきものであったが、編集の際のミスで掲載が遅れたことを記す。
2. この論文の内容を含めた「夢幾夜」全体を通じた夢解釈について、筆者は、比較思想学会福岡支部第47回大会（2003.8.9、福岡市女性センター）でのシンポジウム「三浦綾子の深層」で口頭発表を行った。